日刊建設工業新聞（2023 年 6 月 2 日付 13 面掲載）
【中央設計技術研究所　きょうリニューアルオープン　「野々市市郷土資料館　NoNo」　地方創生事業の第 3 弾】

きょうリニューアルオープン

「野々市市郷土資料館　ＮｏＮｏ」

中央設計技術研究所

地方創生事業の第3弾

西原 秀幸社長

リニューアルした施設内部

建設コンサルタントの中央設計技術研究所（金沢市、西原秀幸社長）が新しい管理運営会社となる旧北国街道沿いの野々市市郷土資料館（野々市市本町3丁目）が2日、「野々市市郷土資料館ＮｏＮｏ（のの）」として名称を改め、リニューアルオープンする。

野々市市では旧北国街道のにぎわいを創出するため、官民連携による取り組みを推進しており、その一環として昨年度、郷土資料館の活用事業者を公募型プロポーザルで募集。その結果、同社が契約候補者に選定され、今年4月1日に運営権を取得し、本格営業に向けて内装工事などを進めていた。

市郷土資料館は、1982年に「旧魚住家住宅」を利用して開館、1994年には現在の場所に移築し、同時に展示棟も増築した。市指定文化財の「旧魚住家住宅」は江戸時代末期の農村の商家で、建物内部を郷土資料館として公開している。

新しい名称の「ＮｏＮｏ」は、昔の野々市の「の」と、今の野々市の「の」を重ね合わせたもの。シンボルマークは「の」を二重にしたデザインを採用し、地域に愛される施設づくりを目指す。

同社は運営にあたり、昔ながらの野々市を紹介する資料館として、地域の歴史や民俗、同建物についてわかりやすく説明できるような施設とし、新たに飲食できるカフェを併設。古民家風の趣のあるカフェでは、地元産のそば粉を使った手打ちそばが味わえる。

加えて、地元の人が作った雑貨や、採れたての野菜を販売できる直売コーナーも設け、地元の人が集まる交流の場として、地元の人がコミュニケーションを取れるような場を創造した。ここでは、地元の中村酒造の復活した銘酒「猩々」も販売する予定。

また、最新のＶＲ技術を使って、今の野々市の画像と、復元した昔の野々市の画像を重ね合わせ、これまでのまちの発展の歴史を表現することも計画中。さらには、将来のまちづくりも紹介することで、過去から未来までの野々市を見せられるような施設にしたい考え。今後、産学共同で制作に取り組んでいく方針だ。

オープン以降も、国の補助金を得て一部工事の継続や備品購入に充て施設の充実を進めるほか、2年目以降は、地域と一緒になってイベント開催など、段階的に賑わい創出に向けた取り組みを増やしていく。

西原社長は「かつての北国街道は野々市の中心的な街道だった。江戸時代は多くの人が往来し、大変賑わった場所であり、そこを復元させて、子どもたちから年配の方まで、気軽に立ち寄れるような場所にしたい」と、にぎわい創出に意欲。同社はこれを機会に、施設内に野々市事務所を開設。社員を常駐させて全体的なマネジメントを行う。市でも将来的には、北国街道周辺の活性化に向けて、同社に中心的な役割を担ってほしいと期待を寄せる。

今回の運営事業は、同社にとって地方創生事業の第3弾に位置付ける。2015年10月に白山麓に地域活性化会社「白山瀬波」を設立し、地域おこしをスタート。続いて、2018年7月から白山市河内で千丈温泉「清流」の運営を担い、そのノウハウを培ってきた。西原社長自身も、ふるさとの「白山瀬波」の立ち上げから現在まで中心的な役割を担ってきた。その経験から「地域おこしは、地域の人になったつもりで、地域の目線で、地元と一緒になって、やっていかないと決してうまくいかない」と語る。

白山瀬波のキャンプ場は、同社が携わる前は年間200人程度の利用だったが、新たに登山道などを整備し、年間8000人が訪れる場所に生まれ変わった。また、間伐などで日当たりを良くしたことで、一帯にカタクリの花が咲くようになり、春には観光客で渋滞が発生するほど、人が来るようになった。同社は国際高等専門学校で年に一度、地方創生の取り組みについて講義を行っているほか、毎年のように、地方創生への貢献で表彰や感謝状を受けている。

第2弾の千丈温泉「清流」は、新型コロナの影響で厳しい運営を強いられているが、「地元の人を雇用し、地元の人が入浴や食事、宿泊などいろんな形で利用してくれる」と、防災拠点にもなっている同施設の運営を通して地域に貢献。昨年初めて外国人団体客の利用もあり、今後はコロナが落ち着き、県内外の観光客をはじめ、インバウンドにも期待している。